

世界のどこかで

多田龍介

◆ 目次

傲慢

6

足るを知る

8

悲観罹患

10

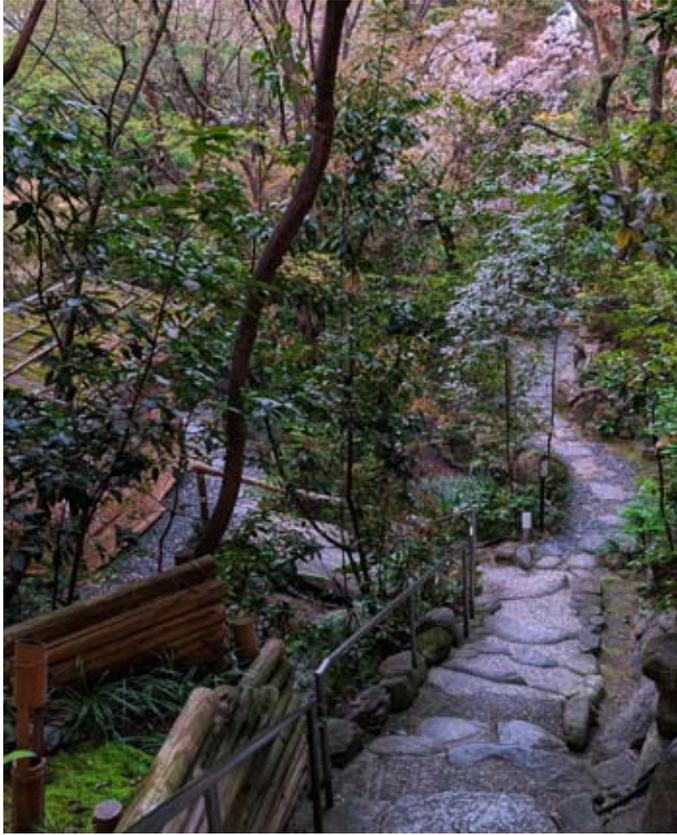
ノーファウル

12

愚直に

14

民主主義？	16
虐殺はどこから	18
世界のどこかで	20
オカルトカルテ	22
論点、争点、盲点	24
もめないためのメモ	26



傲慢

諍いさかいの仲介役とし親分が
強きを助け弱きをくじく
って感じですね

改めろよ

そんなんじや誰もついて行かないよ

弱きを助け強きをくじくでしょう
普通

WW2のときは

善玉と悪玉を

パッキリ分けられた

今回はそうもいかないようだ

じゃ

僕以外、全員悪玉ってことで

まあ、話し合おうではないか

足るを知る

刑というのは

行動の制限が多いんだと

つまり閉じ込めちゃうんですわ

ところで僕

もう生命の最小単位

どこにも行かない

タンスの自由に意味はない

アル中も自由度は低い

まあ、君みたいな人間は

ちよつと縛られた方がいいんだ



悲観罹患

甲子園で優勝した帰りに
交通事故で死なないとも限らない

なんて気にしていたら

何もできないので

私は気にせず生きていきますっ

あ、そう

気にして何もしない人もいるんだよ

ペシミスティックな日本人として

最悪のケースを想定していきたい

気にしないでいいから

気にしなくてもね

なすべき程のことなど何も無い
という思いが

僕が何もしてこなかったかどうか
眼かっぼじってよく見ってみろ

ノーファウル

極めて善良に詩を書いていただけで
この言われようだ
どう思われますか

なぜこんなに

ヘイトを稼いでしまうのか

刺身を海苔に巻き手巻き寿司

勝利者の味がするね

こういうところか

ぐつと堪えて

子供に意志力を発揮せよとは
無理な注文だ

しかし暴れた分だけ
縄は食い込む

僕ももう辛い
大人しくしといてつかあさい

愚直に

あたい会いたいわ
たらいが降ってきた
新しい出会いを探そう
そんな気力もない

自傷詩人

これなら当てはまる気がする
死のう交渉
これも

いやいや、生きたい
生きられない

野性は死んでいる

精神科医の仕事は
患者内部の獣を
殺すことなればなり

民主主義？

息子…選挙行ってきた

父…おう、どこ入れた

息子…○○党

父…だからお前はバカなんだよお

選挙行きたくなくなった

なぜなのか

他にも、他にも

娘…比例区は○○党もいかなって

母…うん、いいわよ。○○はダメ

なぜなのか



虐殺はどこから

僕のおおざっぱな理解で書かせてもらおうと

十九世紀？ フロイトを皮切りに
精神医学の台頭があつた

フロイト、ユング、アドラー

アドラーなどはいまだに持ち上げられる

理論をこねていたようだが

実地でやっていることは

それ以上の惨いこと

それは今も変わらない

と、ここへニーチェさん餌食に
あうあうあーに

その後に来たものは

よく知られたナチスドイツだ

精神医学が口火を切っているのだ

この伝で行くと

ここもそろそろこと切れそうだ

世界のどこかで

僕が瀕死だった時
君たちは笑っていた

まあまあ

いいじゃないですか

君たちが瀕死だった時

僕が笑ってたかも

しれないじゃないですか

そうだねえ

だから大いに

笑ってもよい

自分のケツに

火がつくまでは

もうついてましてん
なんだってー！

よし、一緒に訴えよう

オカルトカルテ

自殺なんてね、する必要ないと思うよと医者の方
笑う
する必要があつた人を考えるのが貴様の仕事だろ
う
実は動機も割れているのである、ええ、君が殴つた
医者当人もご存知なのである、ええ、僕が殴つたと
隠されたものがあるとのその指摘、被害もこれほど



論点、争点、盲点

見えていないものがあると
判断が狂う

実に、何も見えていないのである

天才と狂人は紙一重という

今は、天才とバカは紙一重という

僕にモザイクが入ったのだ

そういうわけで

重要な部分は全部モザイク

判断できるわけがない！

であろうとそれでも民意
受け容れたまい

もめないためのメモ

失われた現実を取り返そうとする心の働きが
怒りなら

失われた現実を取り返せないと受け容れたとき
悲しみが生ずる

さめざめと泣くことができたとき
人は前を向くことができる

が、君たちは怒りの真っ最中
取り返せないんですよ、もう

力学がわかったところでそれが何になろう
復讐を止めるほどの力もない

暴れる血潮も枯れはてて
立たないし、立たないし

世界のどこかで



令和八年三月三日 初版発行

著者 多田 龍介

発行者 多田 龍介

発行所 明水 工房